

舞台芸術コース特集

舞台芸術は総合芸術、 劇場「クリスタルステージ」も完成!

学生の公演活動は花盛り

劇づくりに必要な
専門分野をすべて経験しよう

本号は舞台芸術コースの特集です。舞台芸術は総合芸術といわれる
そうです。まず企画、つづいてシナリオ、演出、演技、装置デザイン、
美術、照明、音楽、音響などなどの専門分野が集まってはじめて舞台
芸術というひとつの作品ができあがるからです。これら劇づくりに必要
な分野を幅広く体験できるのがこのコースの特徴といえます。コース
主任の宮井市太郎教授に現況を寄稿していただきました。

コースの現況

今、世の中ではたくさんの演劇やミュージカル、オペラが上演され、どれもたいへんな人気を
博し、社会や人々に大きい感動とエネルギーを呼び起こしています。

本学の舞台芸術コースは、こうした新鮮な感動を演劇やパフォーマンスを通じて“如何に創り
上げ、伝えていくか”を学ぶコースです。2002年に、前身の“演出空間コース”から誕生しま
した。現在1~4年生で120名余の学生が学んでいます。

このコースには三つの特徴があります。その一つは、劇づくりに必要な専門分野をすべて体験
できることです。二つ目は、映像造形学科に所属しているため、実際に映像づくりやコンピュ
ータを使った表現技術が学べることです。三つ目は、前身が演出空間コースということから、舞台
装置デザイン、劇空間デザイン、イベントスペースデザインといった舞台やテレビ、映画の空間

コース主任 宮井市太郎

デザインが学べることです。

2005年には、劇場“クリスタルステージ”が完成しました。これを期に学生達の公演活動は
日増しに増えて、現在までに(2006年7月)17の公演が行われています。授業の課題公演、自
主グループの公演、クラブ活動の公演と上演元は様々ですが、日頃の授業で培った知識と表現技
術を実際の公演の中で体験しています。

総合芸術といわれる“舞台芸術”を通じて、学生達はそれぞれの企画力や表現力を高めること
はもとより、人間関係の大切さを知り、そして上演で最も必要とされる集中力を身につけ、社会
に巣立ってゆきます。

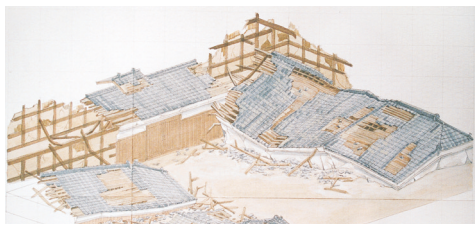
私はこういう教員、こんな授業をしています 宮井市太郎



“舞台芸術”は、人生を豊かに、そしてより感動的なものに高めてくれる、エネルギー
そのものだと思います。授業では、舞台やテレビでの空間構成、いわゆる「舞台美術」「テ
レビ美術」「演出空間デザイン」「シニックデザイン」「イベントスペースデザイン」を教
えています。空間デザインを通じて“人の心”の表現が、私のテーマです。舞台美術では、
舞台見取り図と舞台図面の作成方法と模型制作を学びます。シニックデザインでは、映
像の被写体空間のデザイン方法を学びます。いずれも、シナリオから読み取ったものを、
どう“空間化”するか、そこに重点をおいて指導しています。スケッチや図面で考えたも
のを模型にして、自己の考えた空間を分析、検証してもらいます。

■宮井先生の作品

これは、阪神淡路大震災で倒壊した酒蔵から、主人公が再起を果たしてゆくという、テ
レビドラマのセット作品です。(1997年放送・NHK連続テレビ小説「甘辛ちゃん」より)



この学生のここを評価する

■勝村 友香(四回生) 「戦神伝記」装置デザイン



◎評 価

この作品は、2005年11月18日に発表された、
卒業制作公演「戦神伝記」の舞台装置作品です。
内容は、坂上田村麻呂の「蝦夷討伐」を軸に二人
のヒーローについて描いたもの。9尺×15尺の和
紙パネルに巨大な龍の絵を、墨絵風に描いたドロ
ップがメインセット。都の守り“御霊柱”との構成をもとに、
古代の雰囲気や滲ませ、各場面、共通のセットとしている。

和紙を使うことで、照明の演出を大きく引き出していて、いくつもの表情の空間をつくり出している点、
成功している。3尺の棒を、剣として使ったり、室内の境界として使用したりして、“場”に対する観客
の想像をうまく助けている。

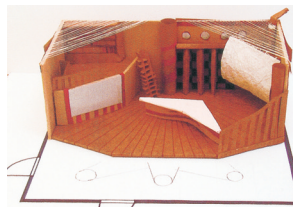
●これからの課題

舞台セットと役者の動きが、有機的に構成されて、はじめて生きた舞台空間が生まれる。やや平板な配
置が、空間の奥行きや役者のタテの動きを単純にしている。この点の克服が今後の課題。

■山田 梨絵(三回生) テレビ番組セットデザイン

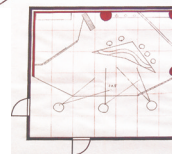
◎評 価

この作品は、世界各国の絵本を紹介する、テレビ番組のスタ
ジオセットデザインです。絵本を前にした時の、ワクワクする
気持ちを“冒険”と“船”の持つイメージから構成を試みた点、
その着想はすばらしい。セット内のモニターとは別に、船の帆
をスクリーンとして使用し、空間の中に映像のマチエールを取
り込んでいて、たいへん密度の高い空間構成がなされている。



●これからの課題

空間を壁で囲って表現しようとしている点、やや、安易である。
船室内としてのつじつまよりも、船から冒険へつながる気持ち
の“拡がり”が空間として、もっと生かされれば良かった。



いま、業界は

舞台芸術は総合芸術といわれます。それは、企画から始まり、シナリオ制作、演出、演技、装置デザイン、
美術制作、照明や音楽、音響等の専門分野が、同時にひとつの作品を創りあげるからです。しかし、その
ひとつひとつの専門分野は、個別の会社であったり、プロダクションであるケースが殆どです。つまり、
舞台づくりでは、それぞれの役割分担がはっきりしています。大切なことは、“自分は何ができるのか”
をはっきり示すことと、“人には負けない専門力”を持っていることです。

私はこういう教員、こんな授業をしています 原 駿二



芝居空間で“劇的世界”を語ろう!

「演劇概論」「舞台芸術史」「卒業制作・論文」担当

演劇、舞台芸術の概論と歴史の授業を、クリスタルステージでしようと思
い立ったのは、芝居の空間で、芝居について語るのが、最も適していると思っ
たからだ。試行錯誤の教授法であるが、続けよう!“劇的世界”の魅力を、学生
に体感してもらうために。

私はこういう教員、こんな授業をしています 上海 太郎



私の授業は舞台上での演技の実習である。が、おおまかに2つのパートに分かれている。ひとつはダンスやパントマイムを用いた身体表現の時間で、もうひとつは台詞劇の時間である。どちらの時間においても最も大切なのは「おもしろい」ということだ。あらゆることで大切なのは基本である。身体表現で言えば体の柔軟性、筋力、立ち方、歩き方、軸の作り方etc...。だが基本トレーニングほどつまらないものはない。つまらないが必要だ！と自分が実感して初めて基礎に立ち返ることができる。授業ではまっ先に踊りを振り付けたり、台本を渡してグループごとに作品を作ってもらい。そしてその上で学生が必要とする訓練法を少しずつ教えて行くようにしている。求めよ、さらば与えられん。

■上海先生の作品

この学生のここを評価する



■林 尚見(四回生) 卒業公演「戦神伝記」脚本

◎評価

たいへんよくできた本だと思います。京から派遣された坂上田村麻呂と蝦夷の首領阿弭留流為との友情と葛藤を見事にドラマの中心にすえています。2人に加えて乾風役の上土君の演技がすばらしかったのが見応えがありました。林のよく観てる劇団新感線に影響を受けているなあ、と感じつつも、何ごと最初は模倣です。そこから徐々に自分のスタイルや自分ならではのテーマを見つけて下さい。

●これからの課題

物語は蝦夷征伐に出た坂上田村麻呂が、道中通りがかった村から毎年人質に娘をひとり差し出させていた龍を退治しようとする内、蝦夷の族長阿弭流為と意気投合し、都からの指令と阿弭流為との友情との板ばさみになるというドラマである。田村麻呂、阿弭流為、龍の3つの役どころを魅力的な俳優陣がこなしていたので楽しい舞台になった。ただ、田村麻呂があまりに好人物に描かれており、あまり葛藤もなく友情を選び、また部下達も田村麻呂が裏切るとを予想し過ぎてドラマが盛り上がりなかった。やはりストーリーを背負う人間達の書き込みの浅さが、ドラマを形だけのものにしてしまったようだ。だが骨組みはしっかりしているし、林尚見の脚本家としてのこれからに期待したい。中山千穂は演出と音響プランとどちらも良い仕事をしたが、いかんせん全体に音量が小さ過ぎて音響効果としては物足らなかった。惜しい。

上海太郎舞踏公演「マックスウェルの悪魔」 —愛は地球を滅ぼす— 構成・振付・演出:上海太郎

熱力学の第二法則をモチーフに人類の終焉を描いた作品。愛はこの世の全ての憎しみと差別と貧困を消滅させ、やがて地球上には精神的熱死状態があらわれる。写真は悪魔の手先の「白玉」が宗教の名のもとにはりつけにされ焼かれるシーン。…と書いても何のことかさっぱりわかりませんよね。



■岩村 尚弥(三回生) 公演「Me and My Girl」演出

◎評価

典型的な高校演劇部出身タイプ。それなりのキャリアがあって、芝居が大好きで、照明などのスタッフの仕事もこなせるオールラウンダーなのだが、ちょっと伸び悩んでいる気がします。人望もあってついつい周囲から頼りにされ過ぎ。と言っても岩村以上に力のある人間がクラスに見当たらないからしょうがないか…。

●これからの課題

ひとこと言うと、主演のビル役の大川和也だけがやりたいことをやって、他のみんなはしょうがないに付き合っているのを見ました。芝居やたかぬ奴は舞台なんか立つな！岩村が言わないなら俺が言うぞ！いかにしてテンション上げるか、考えて下さい。



いま、業界は

演劇の世界と言っても大きく分けて2つあります。商業演劇とそれ以外、メジャーとマイナー、金もうけを目的とするか作品を作ることそれ自体を目的とするか…。言い方はいろいろ言えますが、私自身は後者の方、アートのための演劇を模索し続けています。結果、私自身は商売としての演劇を学生に語ることはできません。純粋にアートとして演劇をとらえるなら、作品はあくまで自分の為に作られるべきです。(ただしその作品は自分をとりまく社会、つまりは観客と時空間を共有することによって初めて成立し、そこで自分が社会抜きで、自分をとりまく環境抜きで、宇宙抜きで語れない存在だということに気付くわけですが…。)演劇を通して「人間が生きる」とはどういうことか？を発見して下さい。

私はこういう教員、こんな授業をしています 安藤 俊雄

これは2005年11月9日、10日に森ノ宮ピロティホールで照明デザインをしたNew OSK日本歌劇団公演です。学外研修実習もかね、機材搬入、設営、リハーサル、本番(見学)、撤去まで、ほんのすこしの部分ですが、学生も参加しながらつくりあげた作品です。学生にとっては、実際目のあたりにした演技、演出、音楽、振付、美術、装置、照明はボリューム、クオリティ、スピードとともに本物の凄さを実感、大変印象に残ったようです。

その他私の仕事としては、松竹座のNew OSK日本歌劇団公演プラン、宝塚歌劇団の大劇場公演および宝塚歌劇団関係の催物、公演のプラン、それ以外でも色々なアーティストのコンサート、パレエ、ミュージカル、ディナーショー、芝居、オペラ、建築空間演出照明デザイン、ジャパンエキスポパビリオンの照明演出デザインなど幅広く手掛けております。

■安藤先生の作品



この学生のここを評価する



■村上 慶(四回生) 卒業制作公演「Captive」

◎評価

照明の基本は、ものを見るようにする事、見えなくする事、色彩的な表現、演出表現を効果的にすることだ。卒業制作公演も、脚本、演出、演技、音楽、美術、衣装、振付など、全体にまとまっていて、それに引っ張られるかのように、照明もそれなりに問題点のないプランになったようだ。

●これからの課題

演出意図がより良くお客に伝わる手助けするのが、照明デザインの本質だ。この作品の主題のクラブ・キャプティブが、ホール入り口のアメリカのレストランシアター風看板、客入れの時のミュージカル「シカゴ」を連想させるBGMでのお迎え、小気なディナーショーのメニューのようにデザインされたプログラム等があるなかでは、演出照明として客入場時に、緞帳も無く暗い紗幕のおりた味気ない空間ではなく、ドアの中一歩足を踏み入れた瞬間、ホール全体がまるでレストランシアターに来たと思わせる、いわゆるツカミの照明演出が有れば、良かったのでは？

いま、業界は

舞台照明や映画照明から派生した照明技術は、電気を使って物を照らす技術専門操作員ではなく、近年において、光のアーティスト、デザイナーとしての立場の職種を確立させた。それには、知識、技術、基礎、基本、基準はもちろん、それを越えた物作りの創造する芸術的な感覚の部分が重要視され、舞台芸術の根源である演出された対象物(物体、肉体、空間、音、音楽、時間、動き、観念、感覚)に対する認知力、洞察力もよりいっそう高度な次元に対応することが必要不可欠。それのみならずテクノロジーの分野で、日々めざましく発達を遂げるコンピュータが組み込まれた照明機材、そして最近冬になると一般家庭の軒

■岩村 尚弥(三回生) 公演「ALICE IN WONDERLAND」照明

◎評価

このたび彼女は、舞台稽古での実際の明かり作りにおいて、とまどいがあり、時間に追われ、現場でのプラン作業が遅れぎみになり、苦労したようです。しかし、その反面、その楽しさ、難しさ、充実感をたくさん味わい、貴重な経験をしました。照明デザイン構成では色使いの基本の良いところ、オペレーション技術の確かさとともに、ホールの照明基本仕込みをモチーフにして、アレンジすることで作ったプランを使用した事は、限られた時間の中賢明だったと思う。

●これからの課題

照明(明かり作り)とは演出、装置、役者、音楽、ステージングと一緒に、複雑にからみあひながら作ってゆくわけであるが、事前のプランニングの段取り作業ではなく、舞台稽古に於いてはじめて照明と一致できる空間、時間、瞬間、その時の間合い、その場でのみ沸き上がる一瞬のひらめきや、内面からこみあがる感覚の具現化等それらすべてを加味し、積み上げ、創作していき全体をバランスよくまとめることと思います。今後、明かり作りにおいて、今何が必要か、今何が一番大事か、今なにをすべきかをよりいっそう突き詰めてほしいと思います。



■甲田 剛章(二回生) 三回生公演「国民減少計画」

◎評価

予算と時間はあればあるほど困らない。舞台に関わったものすべて思う事。今回もその通り上記条件が満たされないのに加えて、具体的になかなか決まらない内容、大幅変更される各要項で一向に進まない照明プランニング中、相談されてこちらからアドバイスした2点、赤い月、レーザー砲のアイデアのもと、月の位置、レーザー砲のアーム取り外し等、自分のイメージと創造力+αのひと工夫があり、作品形成、演出に照明が大いに貢献したと思う。

●これからの課題

今回は役者兼任や、他の学生との合同照明プランという事で、いろいろ目が届かなかったと思う。そして、事後アンケートで問題点とされた部分があるとすれば(照明だけの問題ではなく)まずは、舞台制作の基礎、基本、基準(時間管理含めて)稽古の基礎、基本、基準(時間管理含めて)の活用を再考すれば、うまい、へたは別として、問題点も解決されると思う。

今後改善後は、照明デザインする上で納得出来ない所はもっと脚本、演出、役者、音楽、装置にしつこくアタックして解答を明確にし、より照明の作品形成に貢献して下さい。

先きでよく見られるが実は、最先端の素材であるLED電球などを扱うことで技術的、専門的に特化され、そしてより複雑で、多種多様なスキルが必要となった。

舞台以外の冠婚葬祭、式典、建築、ライトアップ、アミューズメントテーマパーク、はては、おまつり、カラオケ、スポーツ、運動会、格闘技、レース競技などにも利用され、そしてこれからの生活に光の演出文化がますます発展し、それとともに世間での照明家の役割がますます増えてきているという事です。

平成18年9月20日発行

■発行所 宝塚造形芸術大学 〒665-0803 宝塚市花屋敷つつじが丘7番27号 PHONE 072-756-1231

■発行人 橋爪竹一郎 ■編集 橋爪竹一郎 尾崎 勇 [URL] <http://www.takara-univ.ac.jp>

テレホンサービス ☎0120-561-257

[E-mail] info@takara-univ.ac.jp